宮崎県立看護大学研究紀要5(1):44～53, 2005

資　料

訪問看護実習における家族援助に関する学生の学び
－4年次の訪問看護ステーション実習記録の分析から－

中村千穂子，川原瑞代，松本憲子，髙藤ユキ，小野美奈子，瀬口チホ

【抄　録】

学生は訪問看護ステーション実習において看護の対象としての「家族」への援助についてどのような学びをするのかを明らかにし，訪問看護ステーション実習の意義と学生の家族への援助の理解のための教育方法や内容充実に向けて方向性を得ることを目的に平成13，14，15年度臨地実習Ⅲで訪問看護ステーションを選択した学生10名の臨地実習Ⅲの実習日誌および実習終了後のレポートを分析した。

その結果，在宅療養者とその家族に関わった体験や訪問看護師が行った看護とそれらの体験を通して学んだことに関する記述，184が抽出できた。これらの記述について，家族への援助についての学びから記述内容の類似性によりカテゴリー化し，24のサブカテゴリーに類別できた。さらに，カテゴリー化し11のカテゴリーに類別できた。学生は，家族を1つのまとまりとして個別性があり，主体となる存在で，セルフケア能力を持ち，生活過程を持つと学んでいた。その結果，家族への具体的な援助について学んでいた。また，家族員一人ひとりに目を向けたり，関係性に目を向けることの大切さも学んでいた。このように，家族を看護の対象として捉えるようになったことが家族への援助の理解を促進したと考えられる。

また，訪問看護ステーションという，対象の家庭に出向き，家族と出会いつつ看護過程を展開することも家族への援助の理解には関連しており，訪問看護ステーション実習の有効性が示唆された。

一方，家族と地域の関連についての学びは少なく，今後，家族の生活を支援するという立場で地域全体を評価し，地域づくりへと発展させていけるような実習指導についての課題が明らかになった。

【キーワーズ】　訪問看護実習，看護学生，家族援助

Ⅰ　序論

1．はじめに

本学では，人間はすべて地域社会の中のある家族の一員として個別なライフサイクルを送ることになるという事実を前提として，「基礎看護学」「家族看護学」「地域看護学」「体験・統合科目」の4つが教育課程の専門科目群の中に位置付けられている。「家族看護学」では家族全体を看護の対象としてよ

Chihoko Nakamura, Mizuyo Kawahara, Noriko Matsumoto, Yuki Takafuji, Minako Ono, Chiho Seguchi：宮崎県立看護大学

り健康的な生活が送れるように，また，「地域看護学」では人々の生活の場や活動の場の特性を知り具体的な場面において看護の必要性を見出すことに重点をおいている。

学生は4年間の学習の積み重ねによって看護の対象としての「家族」を理解して行くが，実際に学んだ理論や知識をもとに看護過程を展開していく実習により，その理解が促進されている。

地域看護学においては家族の全体像モデル[1]を提示し，地域で生活する家族として捉える教育を行っている。このモデルは，地域で生活する家族を，家族員個々の全体像，家族の心理的つながり，家族の日常生活，地域の人々との関係の4つの視点からまるごと捉えて対象を把握することを意図して作成されたものである。このように，〈地域，家族，個人〉の枠組みを持って対象の全体像を捉え看護過程を展開することや社会資源やケアシステムを活用し看護上の問題を解決したり，個人，家族と地域との関連やケアシステムにおける看護者の役割について理解することなどを実習で目指している。

今回，4年次の臨地実習Ⅲの領域として訪問看護ステーションを選択した学生の実習日誌および実習終了後のレポートが，3年次の臨地実習Ⅱ（地域）の実習日誌と比較して特に看護の対象として「家族」を捉えており，家族の援助に関しての学びが深まったと思われた。

そこで，学生の訪問看護ステーション実習での家族への援助に関しての学びを明らかにし，訪問看護ステーション実習の意義と，学生の看護の対象としての家族への援助の理解のための教育方法や内容充実に向けて検討した。

2．研究目的

学生は訪問看護ステーション実習において看護の対象としての家族への援助についてどのような学びをするのかを明らかにし，訪問看護ステーション実習の意義と学生の家族への援助の理解のための教育方法や内容充実に向けて方向性を得る。

3．臨地実習の展開

3年次の臨地実習Ⅱ（6領域各3週間）では，地域社会で生活する家族を対象として，どのような健康レベルにあっても，どのような場にあっても，その状況を的確に判断し，看護を実践する基礎的な知識，技術，態度を修得することが目的である。

「地域」領域の3週間の実習の中に位置付けられる訪問看護ステーション実習は，概ね2～3日であり，看護の必要性の高い1家族への継続訪問を通して，地域看護を実践する能力を養うことが目的である。臨地実習Ⅱ（地域）では全学生が訪問看護ステーションでの実習を体験する。

4年次6月の臨地実習Ⅲ（3週間）では，さらにチームアプローチを含めて看護の総合的能力を高め，自己の看護観の発展をめざすことが目的であり，学生が主体的に選択したフィールドで実習を行うので，訪問看護ステーションの実習を行うのは希望した学生のみとなる。

訪問看護ステーションの実習方法は，臨地実習Ⅱ・Ⅲいずれも1家族を受け持ち，訪問看護計画を立案し訪問看護師の同伴のもとに訪問看護の一部を展開，見学訪問を行う。臨地実習Ⅱでの受け持ち対象家族は，あらかじめ実習施設が選定した対象の中から学生が決定するが，臨地実習Ⅲでは実習施設が訪問している家族で学生の訪問を承諾したすべての家族を見学訪問し，その中から学生が決定する。

4．用語の概念規定

家族：地域を構成する基本的単位であり構成員が有機的なつながりをもつ社会的集団をさす。

介護者：介護の量や頻度，直接的・間接的にかかわらず，在宅療養者への介護に関わる者をさす。

Ⅱ　対象と方法

1．研究対象

平成13，14，15年度臨地実習Ⅲで訪問看護ステーションを選択した学生10名の実習日誌と実習終了後のレポート。

2．分析方法

1）実習日誌および実習終了後のレポートから学生が在宅療養者やその家族に関わったり援助したことや訪問看護師が行った看護，およびそれらの体験を通して感じたことや学んだことに関するひとまとまりの記述を全て抽出する。

2）前後の関係性を十分吟味しながら，本来の意味が損なわれないようにして，1つの文章に1つの意味を含むように再構成する。

3）科学的抽象を用い，家族への援助についての学びから記述内容の類似性を検討しカテゴリー化する。

4）以上から，学生の看護の対象としての「家族」への援助についての学びについて訪問看護ステーション実習の意義と教育方法や内容充実の方向性を検討する。

なお，分析の信頼性と妥当性を高めるために共同研究者複数で分析した。

3．倫理的配慮

分析対象となった学生（卒業生）には研究目的と研究結果の公表を文書にて説明し了解を得た。また，受け持った対象家族については家族員が特定されないよう留意した。

Ⅲ　結果

実習日誌および実習終了後のレポートから，在宅療養者とその介護者やその他の家族構成員に関わった体験や訪問看護師が行った看護とそれらの体験を通して感じたことや学んだことに関する184の記述を抽出した。これらの記述内容から，学生の家族への援助についての学びは24のサブカテゴリーに類別でき，さらに11のカテゴリーに類別できた（表1）。以下，カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを《　》，抽出した学生の記述を［　］で表す。

分析過程について，カテゴリーⅠ【家族構成員それぞれの24時間の生活や健康状態，相互の関係性に目を向け，介護負担を軽減することの大切さに気づいている】（表2）を例に説明する。

学生の実習日誌および実習終了後のレポートから，［利用者とのコミュニケーションや家族の血圧測定や健康上の相談も受けており，短時間の中でその利用者と家族をみていきケアをしている］［対象を支えている家族の健康が損なわれることのないように，毎回の訪問時に家族の健康状態を明確に把握することも重要］［家族にかかる負担によって，家族の健康障害を引き起こす可能性も考えられる］［マーゲンチューブのトラブルにより介護してきた姉の不安が高まることが考えられるため，精神的ケアも必要になるのではないかと思った］［介護者の健康状態の観察も行い，病院以上に介護者も支援していく必要がある］などの20記述を抽出した。これらの記述は，訪問看護師の提供した看護を観察したり，在宅療養者の健康状態や日常生活を把握し，介護者の介護負担を考えることにより介護者の健康状態を捉えたり，今後予測される健康障害を予防することが大切であると気づいている学びであった。そこで，《介護者としての家族の現在の精神的，身体的健康状態を捉え，更に，今後介護生活が継続することで予測される健康障害を予防するために，健康観察の大切さを理解している》という，学生の学びに関する1つのサブカテゴリーとした。

また，［痛み止めの注射も使っていくということで，より安楽になれると同時に，家族の睡眠時間も確保することにもつながる］［訪問時は，家族にゆっくりしてもらったり，患者が睡眠をとれるように薬の組み合わせを考え負担を軽減することは患者と家族が有意義な時間を過ごすために大切］［介護者の性格，生活リズムなど介護者の生活過程に目を向けることが重要だと再確認］などの5記述を抽出した。これらの記述から学生は，訪問時間以外の在宅療養

表１　学生の家族への援助についての学びの分析結果

	カテゴリー	サブカテゴリー
Ⅰ	家族構成員それぞれの２４時間の生活や健康状態，相互の関係性に目を向け，介護負担を軽減することの大切さに気づいている	介護者としての家族の現在の精神的，身体的健康状態を捉え，更に，今後，介護生活が継続することで予測される健康障害を予防するために，健康観察の大切さを理解している（２０）
		介護者の２４時間の生活に目を向け，介護者の休息の必要性に気づいている（５）
		介護による家族相互の関係性の変化を捉え，話を聞いたり介護の分担をすることで家族間での調整を図る必要性に気づいている（４）
		介護者の介護負担に気づき，その解決の手段として，社会資源を活用することを理解している（３）
Ⅱ－①	在宅では，療養者，家族が主体であり，看護者はその思いを尊重し，意志決定を促しながら，家族とともに考えていくことの大切さに気づいている	介護の考え，介護の時期，互いの関係性，生活のあり様など家族は個別で，多様であることを実感し，療養者と家族が主体であり，その思いを尊重することの重要性を理解している（２４）
		意思決定を促すような援助の必要性に気づいている（３）
		家族のケアへの参加を促すことの大切さに気づいている（３）
Ⅱ－②	療養者や家族は，在宅生活にそれぞれの思いを持っているので，看護者はその思いを把握し，調整することの大切さに気づいている	療養者や家族は，在宅生活にそれぞれの思いを持っているので，看護者はその思いを把握し，調整することの大切さに気づいている（７）
Ⅲ－①	家族の生活，家族の介護力，方法，経済状態などを判断し，それぞれの家庭の特徴に合わせた看護を提供することを再確認している	家族の生活，家族の介護力，方法，経済状態など判断し，それぞれの家庭の特徴に合わせた看護を提供することを再確認している（２３）
Ⅲ－②	家族は自分たちの生活に合わせたアイデアや工夫で介護していることに気づいている	家族は自分たちの生活に合わせたアイデアや工夫で介護していることに気づいている（５）
Ⅳ	看護者は，在宅での療養者と家族が24時間安心して生活できるよう，確かな技術を提供し，緊急時の対処について家族に伝えることの必要性に気づいている	２４時間見守るのは家族なので，介護の負担が増えないように確実な技術を提供し，家族が緊急時に対処できるよう指導することの必要性を理解している（９）
		限られた時間で看護を提供するという訪問看護の特徴から，訪問時間外に家族が安心できるような方法や手段について知ることができている（５）
Ⅴ	療養者や家族との良好な信頼関係が築けるようなコミュニケーションを図る大切さに気づいている	療養者や家族との良好な信頼関係が築けるようなコミュニケーションを図る（１１）
Ⅵ	看護者は介護者に，療養者の良い変化や介護に対する肯定的な思いを表現している。そして，具体的でわかりやすい方法を示すことで療養者や家族の持てる力を引き出す大切さに気づいている	小さな良い変化を捉えたり，家族の頑張りを褒めるなどすることで，介護の意欲を高めたり，技術の習得を促すことの大切さに気づいている（９）
		モデルを示したり，介護方法を具体的に示すことの大切さに気づいている（１０）
		介護力としての家族の力を高めるために，家族の持てる力を引き出すことの必要性に気づいている（５）
Ⅶ	入院から退院後の在宅での生活を予測し，療養環境が整うようなチームアプローチの必要性と家族の介護指導の重要性に気づいている	地域－病院（施設）－地域と療養の場が変化しても，看護が継続するよう生活を予測して関わることの必要性に気づいている（８）
		チームアプローチの必要性を実感している（３）
		在宅での介護がスムーズにスタートできるように，入院中からの指導の必要性に気づいている（４）
Ⅷ	在宅ケアでは，看護者やその他の専門職，ボランティアなどの連携や社会資源をうまく活用することが必要で，看護者は療養者や家族の立場に立ち，調整役を担う必要性に気づいている	在宅ケアチームを構成する専門職の役割がわかり，連携することで療養生活が整うことに気づいている（６）
		地域に存在する社会資源がわかり，活用の実際や課題を考えている（５）
		在宅療養の中で家族が係わる他の専門職者との関係を調整する重要性に気づいている（３）
		看護者が療養者や家族に必要な情報が提供できるための自己の課題に気づいている（１）
Ⅸ	家族は家族としての発達段階があり，介護以外の課題も生じていることを実感している	家族は家族としての発達段階があり，介護以外の課題も生じていることを実感している（８）

（　　）の数字は抽出した学生の記述数

表2　カテゴリーⅠまでの分析過程

学生の記録より抽出した記述	サブカテゴリー	カテゴリー
利用者とのコミュニケーションや家族の血圧測定や健康上の相談も受けており、短時間の中でその利用者と家族をみてゆきケアをしている	介護者としての家族の現在の精神的，身体的健康状態を捉え，更に，今後，介護生活が継続することで予測される健康障害を予防するために，健康観察の大切さを理解している	家族構成員それぞれの２４時間の生活や健康状態，相互の関係性に目を向け，介護負担を軽減することの大切さに気づいている
対象を支えている家族の健康が損なわれることのないように，毎回の訪問時に家族の健康状態を明確に把握することも重要		
家族にかかる負担によって，家族の健康障害を引き起こす可能性も考えられる		
ＭＴのトラブルにより介護してきた姉の不安が高まることが考えられるため，精神的ケアも必要になるのではないかと思った		
介護者の健康状態の観察も行い，病院以上に介護者も支援していく必要がある		
患者だけでなく家族の健康にも目を向ける		
介護者の健康状態を把握し，観察し，整えていくことが重要		
介護者の精神的・身体的負担が増大した時は，ケアを介護者の代わりに行ったり，介護者の身体的・精神的なケアを行う必要がある		
徘徊があるためセンサーでＦさんの行動をみているが，昼夜逆転の生活であるため息子とそのお嫁さんの介護負担は大きい		
家族介護力は必要だが，主介護者の高齢化，病気（疲労），そして本人の病状の悪化が重なり，支える力が弱くなってきている		
在宅療養では，家族は医療者が側にいないことや介護などで肉体的にも精神的にも負担を負いやすくなる。家族への十分な健康面に対する配慮が必要になる		
在宅療養は，介護者の肉体的，精神的負担が大きいので，そのケアをしないといけない		
対象の一番身近な援助者である家族に対しても，看護者としての観察や精神面での整えが非常に大切となる		
看護師は介護者の血圧測定を行う		
介護者の精神状態を考えながら関わっていくことが大切		
看護者が家族をケアに引き込む事によって介護者の健康状態を悪化させてしまうと利用者の生活に大きく影響してしまうので，病院以上に介護者，家族の健康状態の観察，ケアが必要		
老老介護では，介護をする家族も高齢であるため，共倒れにならないよう，家族の健康状態を守ることも欠かせない		
娘はＣ型肝炎だが未受診であり，この娘の健康管理は，利用者本人，娘さん，お孫さんのためにも，必要になってくるということを理解してもらうことも必要		
主介護者である夫は96歳と高齢であり，娘夫婦も60～70歳と，老老介護であり，夫や娘夫婦の健康管理も大切		
看護師は家族の思いを十分に聞く姿勢を持ち，精神的安心を与える		
痛み止めの注射も使っていくということで，より安楽になれると同時に，家族の睡眠時間も確保することにもつながる	介護者の２４時間の生活に目を向け，介護者の休息の必要性に気づいている	
訪問時は，家族にゆっくりしてもらったり，患者が睡眠をとれるように薬の組み合わせを考え負担を軽減することは患者と家族が有意義な時間を過ごすために大切		
介護者の性格，生活リズムなど介護者の生活過程に目を向けることが重要だと再認識		
（老老介護の患者が受診となり，ＭＴを挿入して帰宅し，経管栄養が始まった）頻回に様子をみていく		
介護と離れ，自分と向き合う時間も必要なのではないか		
介護者の特徴を考えないと我慢している所や，遠慮して見せない部分を見落としてしまう	介護による家族相互の関係性の変化を捉え，話を聞いたり介護の分担をすることで家族間での調整を図る必要性に気づいている	
嫁姑の関係の中では難しいかもしれないが，お嫁さんとの関係を密にして，奥さんが1人で負担を抱え込まないようにすることも重要		
患者，家族がお互いに重い雰囲気にならないように，毎回の訪問で，私たちが声かけをしたり，話を聞いたり，介護を代わったりすることは大切		
吸引は娘のみが行っていたが，ご主人も吸引ができるようになれば，娘さんの介護に対する負担が軽減される		
（老老介護の患者が受診となり，ＭＴを挿入して帰宅し，経管栄養が始まった。）少しでも姉が他の介護のサービスを借りようと思えるような働きかけが必要	介護者の介護負担に気づき，その解決の手段として，社会資源を活用することを理解している	
妻が働き家族を支えていて，身体的精神的な負担も大きいと思われるが，在宅でみたいという妻の気持ちを支えるためにＫさんの笑顔と訪問看護やデイケアはとても大切		
家族の在宅療養を望む気持ちを大事にして，療養が続けられるようにできるだけ家族の負担を軽減し，療養に伴う不安が解消されるように訪問やデイケアで十分なフォローが必要		

者と介護者の生活を考え，介護者の24時間を把握し休息の必要性に気づいていることがわかる。これらの記述を《介護者の24時間の生活に目を向け，介護者の休息の必要性に気づいている》という１つのサブカテゴリーとした。

つぎに，[嫁姑の関係の中では難しいかもしれないが，お嫁さんとの関係を密にして，奥さんが一人で負担を抱え込まないようにすることも重要] [患者，家族がお互い重い雰囲気にならないように，毎回の訪問で，私たちが声かけをしたり，話を聞いたり，介護を代わったりすることは大切] [吸引は娘さんのみが行っていたが，ご主人も吸引ができるようになれば，娘さんの介護に対する負担が軽減される] などの４記述を抽出した。これらの記述から学生は，主介護者以外の家族員も含め，在宅療養者と家族員，家族員同士の関係を理解し，家族間での調整を図ることの大切さに気づいていた。これらの記述を《介護による家族相互の関係性の変化を捉え，話を聞いたり介護の分担をすることで家族間での調整を図る必要性に気づいている》とし，１つのサブカテゴリーとした。

また，[(老老介護の患者が受診となりマーゲンチューブを挿入して帰宅し，経管栄養が始まった) 少しでも姉が他のサービスを借りようと思えるような働きかけが必要] [妻が働き家族を支えていて，身体的精神的な負担も大きいと思われるが，在宅でみたいという妻の気持ちを支えるためにＫさんの笑顔と訪問看護やデイケアはとても大切] などの３記述を抽出した。これらから学生は，介護者の介護負担に気づき，さらに，その解決手段として社会資源の活用に気づいていた。これらの記述を《介護者の介護負担に気づき，その解決手段として，社会資源を活用することを理解している》というサブカテゴリーとした。

以上の４つのサブカテゴリーから学生は，主介護者だけでなく，家族員それぞれ生活や健康状態，家族員同士の関係，および介護がそれらにもたらす変化を捉え介護負担を軽減することの大切さに気づいていた。そこで，【家族構成員それぞれの24時間の生活や健康状態，相互の関係性に目を向け，介護負担を軽減することの大切さに気づいている】の一つのカテゴリーとした。

同様に分析を行い，11にカテゴライズできた。カテゴリーは11であったが，その意味内容から看護過程の展開に沿い，カテゴリーⅠからカテゴリーⅨとした。

カテゴリーⅡ－①【在宅では，療養者，家族が主体であり，看護者はその思いを尊重し，意思決定を促しながら，家族とともに考えていくことの大切さに気づいている】とカテゴリーⅡ－②【療養者や家族は，在宅生活にそれぞれの思いを持っているので，看護者はその思いを把握し，調整することの大切さに気づいている】は，療養者や家族が主体であるという学びは共通している。そのうえで，療養者や家族の思いを引き出すことの大切さと，１つの家族であっても思いは常に一致するわけではなく，調整をすることの大切さに気づいたものである。そこで，家族の主体性に関係する援助についての学びであると捉えた。

カテゴリーⅢ－①【家族の生活，家族の介護力，方法，経済状態などを判断し，それぞれの過程の特徴に合わせた看護を提供することを再確認している】とカテゴリーⅢ－②【家族は自分たちの生活に合わせたアイデアや工夫で介護していることに気づいている】は，家族の個別性について理解していることで共通している。その上で，個別性に合わせ看護を提供したり，家族が工夫をすることに気づいている。

以上のように分析した結果，11のカテゴリーにⅠからⅨのカテゴリー番号をつけた。

Ⅱ－①【在宅では，療養者・家族が主体であり，看護者はその思いを尊重し，意思決定を促しながら，家族とともに考えていくことの大切さに気づいている】このカテゴリーは，30記述と３つのサブカテゴリー《介護の考え，介護の時期，互いの関係性，生

活のあり様など家族は個別で，多様であることを実感し，療養者と家族が主体であり，その思いを尊重することの重要性に気づいている》《意思決定を促すような援助の必要性に気づいている》《家族のケアへの参加を促ことの大切さに気づいている》からなる。

Ⅱ－②【療養者や家族は，在宅生活にそれぞれの思いを持っているので，看護者はその思いを把握し，調整することの大切さに気づいている】は7記述からなる。

Ⅲ－①【家族の生活，家族の介護力，方法，経済状態など判断し，それぞれの家庭の特徴にあわせた看護を提供することを再確認している】は23記述からなる。

Ⅲ－②【家族は自分たちの生活に合わせたアイデアや工夫で介護していることに気づいている】は5記述からなる。

Ⅳ【看護者は，在宅での療養者と家族が24時間安心して生活できるよう，確かな技術を提供し，緊急時の対処について家族に伝えることの必要性に気づいている】このカテゴリーは14記述と2つのサブカテゴリー《24時間見守るのは家族なので，介護の負担が増えないように確実な技術を提供し，家族が緊急時に対処できるよう指導することの必要性に気づいている》《限られた時間で看護を提供するという訪問看護の特徴から，訪問時間外に家族が安心できるような方法や手段について知ることができている》からなる。

Ⅴ【療養者や家族との良好な信頼関係が築けるようなコミュニケーションを図る大切さに気づいている】は11記述からなる。

Ⅵ【看護者は介護者に，療養者の良い変化や介護に対する肯定的な思いを表現している。そして，具体的でわかりやすい方法を示すことで療養者や家族の持てる力を引き出す大切さに気づいている】このカテゴリーは24記述と3つのサブカテゴリー《小さな良い変化を捉えたり，家族の頑張りを褒めるなどすることで，介護の意欲を高めたり，技術の習得を促すことの大切さに気づいている》《モデルを示したり，介護方法を具体的に示すことの大切さに気づいている》《介護力としての家族の力を高めるために，家族の持てる力を引き出すことの必要性に気づいている》からなる。

Ⅶ【入院から退院後の在宅での生活を予測し，療養環境が整うようなチームアプローチの必要性と家族の介護指導の重要性に気づいている】このカテゴリーは15記述と3つのサブカテゴリー《地域－病院（施設）－地域と療養の場が変化しても，看護が継続するよう生活を予測して関わることの必要性に気づいている》《チームアプローチの必要性を実感している》《在宅での介護がスムーズにスタートできるように，入院中からの指導の必要性に気づいている》からなる。

Ⅷ【在宅ケアでは，看護者やその他の専門職，ボランティアなどの連携や社会資源をうまく活用することが必要で，看護者は療養者や家族の立場に立ち，調整役を担う必要性に気づいている】このカテゴリーは15記述と4つのサブカテゴリー《在宅ケアチームを構成する専門職の役割がわかり，連携することで療養生活が整うことに気づいている。》《地域に存在する社会資源がわかり，活用の実際や課題を考えている》《在宅療養の中で家族が係わる他の専門職者との関係を調整する重要性に気づいている》《看護者が療養者や家族に必要な情報が提供できるための自己の課題に気づいている》からなる。

Ⅸ【家族は家族としての発達段階があり，介護以外の課題も生じていることを実感している】は8記述からなる。

Ⅳ　考察

1．学生の看護の対象としての「家族」の捉え方

看護の対象としての「家族」へどのように関わることが援助なのかを判断するには，「家族」をどのように捉えるかが重要である。

栗原は，４年次における実習報告書15事例を対象とし，学生の看護観の発展過程の特徴が当大学の臨地実習のねらいに即して典型的であると評価できた１事例を分析し，臨地実習Ⅱの最終領域において，学生は看護の対象の広がりを個から家族全体と実感を伴って認識していることがわかった[2]と報告している。１事例の分析結果ではあるが，このような看護観の形成が確認されたことから，学生は看護の対象として家族全体を捉えることの重要性を実感したり，実感できる準備性が高まった状態で臨地実習Ⅲに臨んだと予測される。

藤井らは，「家族を主体的存在と捉えることで主体性を尊重することの重要性や家族と看護者の協力などの関係性について考えることにつながるものと考えられる。」[3]と述べている。本研究においても学生は，【在宅では，療養者，家族が主体であり，看護者はその思いを尊重し，意思決定を促しながら，家族と共に考えていくことの大切さに気づいている】ことがわかった。また，【家族構成員それぞれの24時間の生活や健康状態，相互の関係性に目を向け，介護負担を軽減することの大切さに気づいている】こと，【療養者や家族は，在宅生活にそれぞれの思いを持っているので，看護者はその思いを把握し，調整することの大切さに気づいている】ことも明らかになった。このように学生は，家族と看護者の関係性について，家族員一人一人に目を向けたり，家族員同士の関係性に目を向けることの大切さについても学んでいた。家族を主体的存在と捉えるようになることは，家族への援助についての学びの促進に重要であると考えられる。

さらに，【家族は家族としての発達段階があり，介護以外の課題も生じていることを実感している】ことから，家族は１つのまとまりとして生活過程を持つことを学んでいた。

以上のように家族を１つのまとまりとして捉えたり，家族員個々の生活や関係性を捉えることは，家族を療養者の背景としてではなく，家族そのものが看護の対象であることの理解につながると考えられる。看護の対象として家族をこのように捉えるようになったことは，学生の看護の展開にも反映し，訪問看護師が行った看護に対する評価も可能になったと思われる。

２．学生の学びの内容と実習の特徴

当大学のカリキュラムは，学生の頭のなかに個人・家族・地域が常につながりを持つように，基礎看護学を基盤に，地域看護学，家族看護学が並行して学習できるように編成されている[4]という特徴がある。特に，臨地実習Ⅱ終了後の４年次前期には，臨地実習Ⅱの看護体験に基づいて，家族員の健康の可能性を広げる家族看護学の意義について主体的に学習することを目的とした家族看護論Ⅱが開講されている。学生は自分が受け持った対象とその家族の情報を整理し，家族の可能性を広げるための看護の方向性を深め，家族成員がより健康な生活過程を営むための看護者の働きを検討する過程をとおして，家族への理解を深めている。臨地実習Ⅲはこのような学習を終えた段階で実施していることから，実習を通して自己の体験を振り返り学び取ったことを意識的に活用したり，再確認できたと考えられる。

訪問看護ステーションという実習の場の特徴である対象者の家庭に出向くということは，自分の五感を使って対象者の生活環境の情報を得ることができる。さらに，家族全員でなくとも主介護者等と直接話をする機会も得やすいという特徴がある。

学生は【家族の生活，家族の介護力，方法，経済状態など判断し，それぞれの家庭の特徴にあわせた看護を提供することを再確認している】ことや，【家族は自分たちの生活に合わせたアイデアや工夫で介護していることに気づいている】ことが確認できた。臨地実習Ⅲにおいては，複数の家族をそれぞれ数回ずつ訪問することが可能なため，在宅療養者や家族の生活する環境にも注目し，次第にコミュニケーションがとれ，家族のさまざまな状況をみてと

ることができるようになった。また，各家庭での介護の工夫を知ることで，家族はセルフケア能力を持つという理解につながる学びだと考えられる。

さらに，【看護者は介護者に，療養者の良い変化や介護者に対する肯定的な思いを表現している。そして，具体的でわかりやすい方法を示すことで療養者や家族の持てる力を引き出す大切さに気づいている】学びもしている。これは，セルフケア能力を高める援助についての学びにつながる。

樋口らは，在宅看護実習における学生の学びについて訪問看護ステーション実習のまとめの記述を分析し，「療養者・家族の自尊感情と自己効力を育む」「療養生活と家族の健康生活を支援」「セルフケア能力と生活意欲の向上」「療養者の身体の機能の保障」「状況に応じた対応と問題解決」「介護力に沿った指導」「療養環境の整備」の７つのコアカテゴリが形成された[5]と報告している。今回得られた結果の内容と共通性が見られることから，訪問看護ステーションでは家族への援助を通し，在宅看護の特質についても学んでいる。

３．地域看護学の中での在宅看護

訪問看護ステーションの利用者は，入退院の経験を持つ者も多く，退院後，訪問看護ステーション利用予定の入院患者のカンファレンスや退院直後の在宅療養者のカンファレンスに参加する機会もある。

学生は，【入院から退院後の在宅での生活を予測し，療養環境が整うようなチームアプローチの必要性と家族の介護指導の重要性に気づいている】ことが明らかになった。さらに，【在宅ケアでは，看護者やその他の専門職，ボランティアなどの連携や社会資源をうまく活用することが必要で，看護者は療養者や家族の立場にたち，調整役を担う必要性に気づいている】ことがわかった。このように，継続看護の重要性について理解し，継続した看護が可能となるためにどのように関わればよいか気づいていた。このことは，施設内看護において地域での生活を意識した看護を提供することにつながる学びだと思われる。

個人，家族，地域の関連について北山は，「個人，家族，地域は相互に影響を及ぼし合っており，家族は，考えを持った個人個人が相互に作用して，情緒的な結び付きを形成している集団であり，地域社会とも相互に作用を及ぼしつつ家族としての文化を築いている集団であると言えます。」[6]と述べている。学生の学びは個人と家族の関連については理解が深まっていた。一方，家族と地域との関係については，既存の社会資源の活用という理解にとどまり，少数の気づきであった。

地域のケアシステムや施策，地域にある伝統的な考え方などを理解することは，個人，家族と地域との関連を理解することにつながる。また，それらの情報を社会資源として活用することで，在宅での療養生活をより良いものにすることができる。一方，地域看護学からは，個人，家族のニーズを把握し，家族の生活を支援するという立場で地域全体を評価し，地域づくりへと発展させていけるような視点が必要である。その中で，在宅看護の実践者として看護者には，個人・家族を援助する上で地域に存在する問題を提起していく役割を持つことを学んでほしい。そのためには，実習で体験したこととそれまでの講義や実習を通して学んだことを関連付けて考えられるような支援が必要である。また，実習の事前準備として，学生が訪問看護ステーションの訪問地域の地域特性や社会資源について把握できるように関わり，実習中に地域との関連を意識しながら看護を実践できるような援助が必要だと考えられる。

Ⅴ　おわりに

今回，10名の学生の実習日誌および実習終了後のレポートの分析であり，訪問看護ステーション以外の地域領域で実習をした学生の学びとの違いの検討も行っていない。しかし，訪問看護ステーションで

の3週間の主体的な実習は看護の対象としての家族への援助を理解するために有効であることが示唆され，対象の生活の場に出向き，家族に直接会い看護を展開することからの学びを明らかにしたことは，臨地実習Ⅱでの訪問看護ステーション実習や保健師が行う家庭訪問実習での実習指導の方向性を探ることができた。

学生がさらに家族の生活する地域に目をむけ，家族の生活を支援するという立場で地域全体を評価し家族が住みよい地域づくりへと発展させていく役割についてさらに理解できるような教員の関わりは今後の課題としたい。

引用文献

1）小野美奈子：援助困難として訪問依頼を受けた事例の科学的構造，千葉看護学会誌，5(1)，47－55，1999.
2）栗原保子，小野美奈子，稲田夏希：学生の看護観の発展過程に関する研究－4年次生臨地実習報告書の質的分析をとおして－，宮崎県立看護大学紀要，3(1)，18－26，2002.
3）藤井弘子，山本靖子，三谷浩枝：小児看護実習における家族についての学びの現状，神戸市看護大学短期大学部紀要，22，77－88，2003.
4）名原壽子：地域看護学の理念と内容，綜合看護，33(4)，21－28，1998.
5）樋口キエ子，臺有桂，若佐柳子：在宅看護実習における学び－訪問看護実習まとめの記録分析から－，順天堂医療短期大学紀要，14，85－94，2003.
6）北山三津子：家族成員は地域の「一人ひとり」の住民，看護，54(7)，55－58，2002.

Nursing Student's Understanding of Family Care in Home Nursing Practicum

－Analysis of Fourth Year Student's Visiting Nursing Service Station Practicum Reports－

Chihoko Nakamura, Mizuyo Kawahara, Noriko Matsumoto, Yuki Takafuji, Minako Ono, Chiho Seguchi

【Key words】 home nursing practicum, nursing student, family care

Chihoko Nakamura, Mizuyo Kawahara, Noriko Matsumoto, Yuki Takafuji, Minako Ono, Chiho Seguchi : Miyazaki Prefectural Nursing University